

狩野文庫所蔵『天体靈魂図説』について

曾根原 理

1. 書誌等

請求記号は狩野 2-1410-1, 別置 299。近世写本。卷子 1 軸。認定書名は「天体靈魂図説」。巻頭書名「天躰靈魂圖説」。外題なし。残存状況が後欠のため、尾題有無不明。装丁は原装。表紙も原装, 見返し無。料紙は楮紙打紙。全 27 紙, 法量は縦 27.4cm, 横 1240cm (第 2

紙 46.1cm)。界線は金泥。界高 18.3cm, 界幅 1.8cm, 上欄外高 5.8cm, 下欄外高 3.3cm。印記は本文冒頭に「東北帝大図書」朱角印と「荒井泰治氏ノ寄贈ヲ以テ購入セル文学博士狩野亨吉氏旧蔵書」朱角印, 表紙に「東北帝国大学図書」朱角印。¹

2. 著者

『天体靈魂図説』(以下「本書」と呼称する)本体に明記はされないが、依田貞鎮(徧無為)の編著と伝えられる。筆者もそれに同意する。

依田貞鎮(1681-1764)は、江戸時代中期の神学者として知られている²。武蔵国府中(現在の東京都府中市)の上層の庶民の家に生まれ、本姓は源、貞鎮が諱、字は伊織と伝えられる。依田姓は祖先の井田撰津守是政にちなみ、号の徧無為は「水は大なり、徧く諸生に与へて無為なればなり」(『荀子』宥坐篇)から採ったという。

彼は若い頃から広く神儒仏の学問を修めたが、特に 35 歳の正徳 3 年(1713)から翌年にかけて『大成経』の閲覧を果たしたことで、三教一致説の強い影響を受け、多くの関連著作を著した。48 歳の享保 13 年(1728)には『大成経』の注釈書を幕府に献上し、66 歳の延享 3 年(1746)には著作を天皇に献上したと伝えられる。

一方、黒田直邦など好学の大名や旗本と学術交流をし、また江戸の庶民の間にも多くの門人(400 名とも)を得たと伝えられる。

3. 概要

本書の主題や構成を考えるにあたり、まず見出しを列挙すると次のとおりである。

表心総伝／表心別伝／裏心総伝／裏心別伝／前心総伝／前心別伝／初心総伝／初心別伝／中心総伝／中心別伝／終心総伝／終心別伝／肉心総伝／肉心別伝／凍心総伝／凍心別伝／先心総伝／先心別伝／後心総伝／後心別伝／位心総伝／位心別伝／辞心総伝／辞心別伝／

牟心総伝／牟心別伝／下心総伝／下心別伝／靈心総伝／靈心別伝／落心総伝／落心別伝／凡心総伝(以下欠)

ここから、本書の主題が「心」にあること、各種の心について総伝と別伝の両面から説明を試みる記述であることが想像される。実際に、冒頭の部分で確認してみよう。

1 ちなみに東北大学附属図書館発行の『貴重書目録 和漢書編』の記事は次のとおり。「天躰靈魂圖説／伊八一二九九 2-1401-1／〔依田貞鎮(徧無為)編〕写本 挿図あり 彩色 卷子一軸」。

2 依田の生涯に関する基本資料は 1766 年成立の碑文(府中市の善明院境内、釈澄海撰)である。以下の記述は、小笠原春夫『国儒論争の研究』(ベリかん社、1988 年)による。

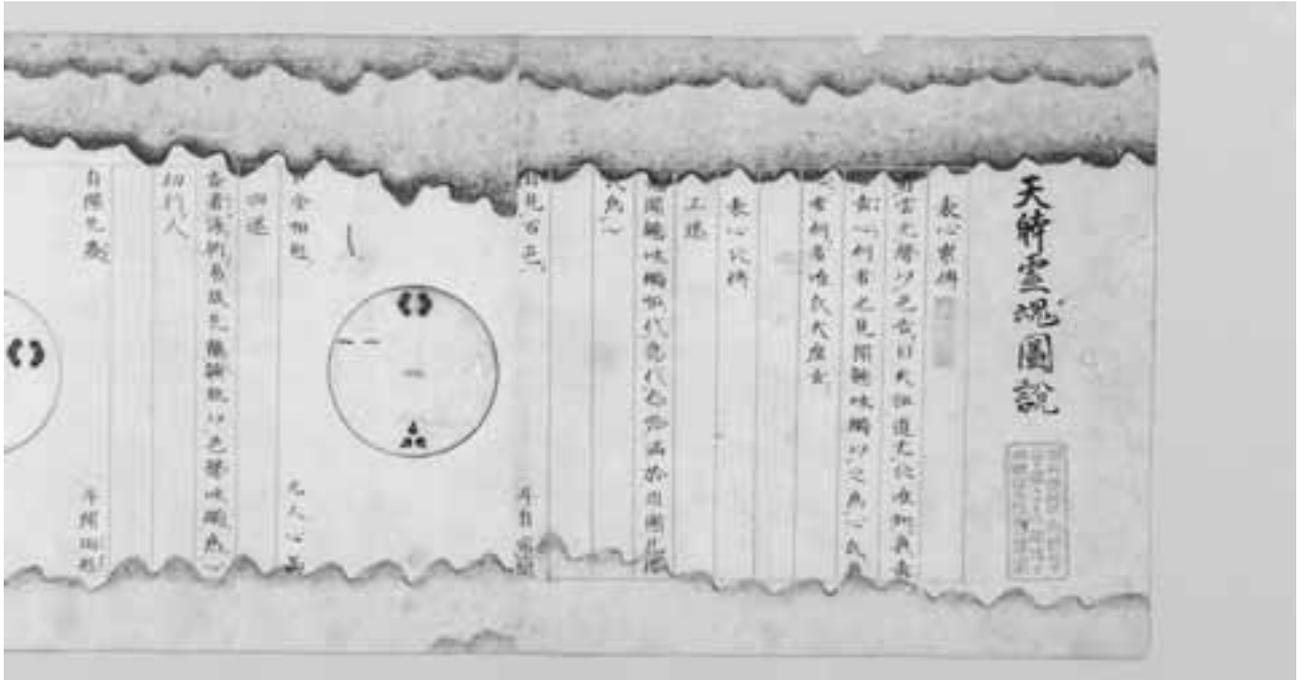


写真1 『天体靈魂図説』卷首部分

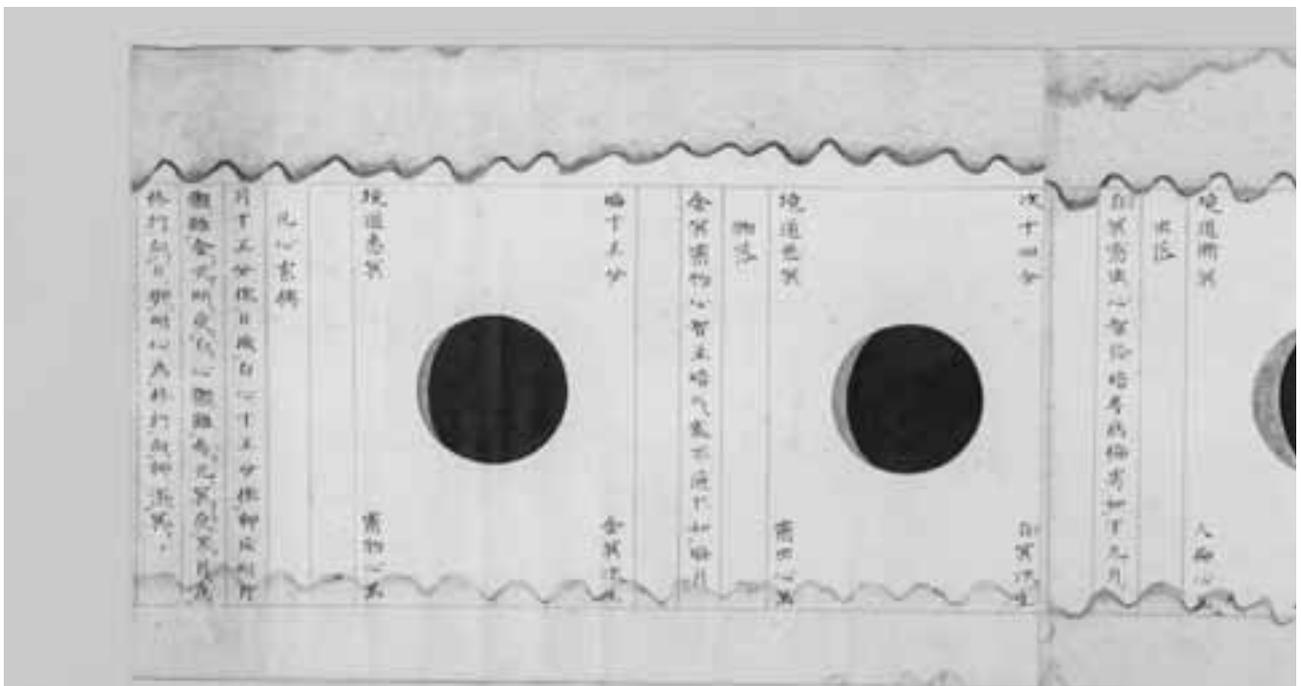


写真2 『天体靈魂図説』卷末部分

表心総伝

有_レ雲無_レ声以_レ色告_テ曰、天祖道無_レ別、唯知_ニル_ノミ
真_ト毒_トノ心_ニ、毒心_トハ何者也、見聞嗅味触以_レ之_レ為_レ
心此_{ナリ}、真心_トハ者何_ノ者、唯此太虚玄_ノミ、

表心別伝

五迷

見聞嗅味触恒_ニ代_レ意代_レ念弥_ニ満_於肉団_ニ、凡俗此
為_レ心、

(第1図) 目見_ニ百色_ニ、耳自常聞、口含相_ト、
凡人心図

四迷

香著浅_クシテ斬_ツコト易_シ、故先離_ニ嗅執_ニ、以_ニ色声味
触_ニ為_レル_ハ心_ト初行_ノ人、

(第2図) 自聞先_レ廢_レ、耳聞両_ト、味欲残留、初
人心図

三迷

声著次斬_ツコト易_シ、仍色味触留、三意残為_レ心、
趣_レ道帯_レ悩人、

(第3図) 二聞已_ニ廢_レ、両_ト見_ト残、為_レ心憂_レ、
趣人心図

二迷

色著斬難、雖難次廢、両_ト為_レ心、入行道人、

(第4図) 前三已_ニ廢_レ、只両_ト残、此為_レ心憂_レ、
行人心図

一迷

姪_ト斬_ツ難_シ、雖_レ難_ト終_ニ廢_レ、味残為_レ心_ト、成_ニ修
行_ノ人_{ナリ}、

(第5図) 前四已_ニ廢_レ、独遺_ニ口_ノ、為_レ心_ト、
修人心図

内迷

五欲去_テ意見_ル、以_ニ無_ニ邪思_ニ意_ヲ為_レ下_ニ遊_ニ道_ノ樂_ニ
心_ト、入_レ道_レ為_レ樂人、

(第6図) 五欲皆去_リ、無_レシテ邪有意、為_ニ之_ノ心_ト、
入人心図

上記は「表心総伝」および「表心別伝」の全記述である。まず「総伝」では、「天祖道」を知るべきことが主張されたのち、何がそれにあたるのかについて、「毒心」を去り「真心」に帰すことであるとされる。そして、「毒心」とは「見聞嗅味触」であり、「真心」とは「太虚玄」であると対比的に説明される。この理論は、仏教教学に由来し神仏習合神道などでよく見られる論法であり、人間の感覚器官（五根＝眼耳鼻舌身）に依拠して、感覚の対象（五境＝色声香味触）を認識するところに、知覚作用（五識）が生じる、その五識＝眼識（視覚）・耳識（聴覚）・鼻識（臭覚）・舌識（味覚）・身識（触覚）を離れ、本来の心のあり方に至ることを説くものである。

やや具体的にその手順を説くのが、「表心別伝」である。ここでは前述の五識を一つ一つ滅ぼし、本来の心に近づける理論的な過程が述べられる。五識を備えた凡人の心に対し、まず嗅覚、次に聴覚、さらに視覚、触覚、味覚の順に除き、ついに五識を離れた「修人の心」を得るまでが記される。

記述を補強するのが、挿入される図である。この箇所では、心全体を表すと思われる円の中に、五識を表すと思われる目耳鼻口などの絵が描かれ、識を一つ一つ除いていくことで心の本来性を獲得する経過が示されている。本書にはこうした図が60ほど挿入されており、文章と図の双方を用いて説明する方式となっている。

「表心」に続き、以下「裏心」「前心」と次々に、心のあり方に対応しつつ本来の心に近づく過程が説かれている。このように本書は、著者が習合神道理論にもとづき心のあるべき姿、さらには道徳を説いた書として把握される。

4. 『大成経』との関係

著者のこうした理論の基盤となるのが『大成経』であると考えられる³。たとえば、同書巻第40（経教本紀上巻下）には「吾神道の学」として、「はじめ一心を安くし、次に五心を安くす、その一心とは五心いまだ分れざる

の極、これ人神の心源なり、その五心とは一心分理の界、これ人神の性地なり」⁴と、一なる心が五つに分化し、人の本性となるという考え方が見える。これは本書の論理と一致する。もちろん、『大成経』と本書のみがこ

3 『大成経』に関する拙稿として、「乗因の神道説の異端的性格」（菅原信海編『神仏習合思想の展開』汲古書院、1996年）、「江戸時代の習合思想」（三橋正・ルチア＝ドルチェ編『神仏習合再考』勉誠出版、2013年）がある。

4 神道大系編纂会編・小笠原春夫校注『先代旧事本紀大成経』（三）〈統神道大系論説編〉（神道大系編纂会、1999年）p.26（原漢文）。

うした「一心」と「五心」の概念を持っていた訳ではなく、大きくは神仏習合神道全体の思想潮流の中で、概念や用語の面で両書の間類似性が高いということである。

『大成経』の影響は随所に見られるが、逆に『大成経』との違いがあるだろうか。注目したいのは、頻繁に挿入された図の存在である。『大成経』自体にこうした図が入っていたことは未確認であり、今後の調査次第ではあるが、依田の工夫によるところがあるかと思われる。現時点で私は、『大成経』の教説が普及していく際に、図を用いて視覚の面から受容をはかった点に依田貞鎮の独自性や、思想史上の役割が存在したと考えている。

依田貞鎮の著作については、古河古松軒『四神地名録』（1794年頃成立）の記事「仏道・神道を習合して書し

ものにて、目なれざる図多し。細みつなる事、目を驚すほど見事の図なり」が特徴を押さえている。『大成経』関係や、依田の他の著作を調査することで、彼の位置づけをさらに考えていきたい。狩野文庫本『天体靈魂図説』はその観点からも、貴重な研究対象と考えられる。

【謝辞】

本稿作成にあたりJSPS 科研費 26370076 の助成を受けました。写真掲載については東北大学附属図書館事務部の御高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

(そねはら さとし, 学術資源研究公開センター・史料館助教, 附属図書館協力研究員)